

昭和61年5月12日

四国歯学会

会 報

【第9号】

徳島市蔵本町3丁目18-15 徳島大学歯学部内

I 第5回総会・第7回例会御案内

1. 第5回総会

昭和61年6月28日(土) 13:00~13:30

於・徳島大学歯学部大講義室

総会次第 ○議長選出 ○会長挨拶 ○会務報告 ○議事

本年度定例総会が上記の予定で開催されます。会員各位の御出席をお願いいたします。

2. 第7回例会

昭和61年6月28日(土) 13:30より

於・徳島大学歯学部大講義室

前回までの例会と同様、一般演題を募集いたしますので、多数の演題をお寄せ下さい。

<応募要領>

- 5月31日(土)までに学術委員(桂 茂・石塚 寛, 口腔解剖学第1講座)へ、演題、演者(講演者に○印)、所属を原稿用紙に記入して申込んで下さい。
- 講演時間は10分間、討論時間は2分間を予定いたしております。
- 次回の会報に掲載しますので、講演後に400字程度の抄録を提出願います。
- 演題等詳細につきましては追って通知致します。

Ⅱ 会務報告

1. 運営委員の移動について

昭和 61・62 年度運営委員が下記の如く変更になりました。

庶務担当	西野理事	今西評議員
会計 "	長山 "	佃 "
広報 "	石田 "	林 "
学術 "	桂 "	石塚 "

第 6 回例会講演抄録

〈一般演題〉

1. 歯周組織の機能に調和した咬合接触状態の研究

○横山正秋，高橋伸治，新谷泰司，池田隆志
久保吉廣，中野雅徳，坂東永一

徳島大学歯学部歯科補綴学第二講座

歯冠補綴を行なう歯が長期にわたって機能を維持するためには、歯周組織に調和した咬合接触を補綴物に付与しなくてはならない。歯周組織が正常な場合には、咬合紙により適正な咬合接触状態を確認することができるが、歯周組織に問題があり動揺が大きい場合には咬合紙による診断が困難であり、術者の主観に頼らざるを得ない。

このような歯に対し咬合の高さを客観的に判定する指標として、歯の変位量に着目し、今回光反射型ホトセンサを用いた二次元微小変位計を製作した。この変位計の較正を行なった結果、測定値の信頼性は極めて高いものであった。この変位計を用いて、歯周組織が健康で調和のとれた咬合接触状態を有する 9 名の上顎第一小臼歯における咬頭嵌合位咬みしめ時の変位を測定した。その結果、変位量の平均値は口蓋側方向へ $33.4 \mu\text{m}$ ，歯根側方向へ $23.4 \mu\text{m}$ であり、変位の方向としては口蓋側方向へ歯軸に対して 55° の角度であった。

2. 顎骨の炎症に伴う骨膜下骨新生像について

○増山博之, 上村修三郎

徳島大学歯学部歯科放射線学講座

顎骨の炎症に伴って骨膜下骨新生像が現われることは周知のとおりである。この骨膜下骨新生像を分析することは病態の把握, 治療法の選択及び定期検査時期の決定に大きな示唆を与える。

予備研究として本院に保管されている最近5年間のX線写真から, 炎症により骨膜下骨新生像が出現している28例を対象として咬合法X線写真を中心にその外形と内部構造について分析した。

骨膜下骨新生像は外形別に3型, 内部構造別には6型に大別された。経過観察が行われた症例のX線像と分類型を対比した結果, 各型は各々別個の病態を示すものもあり, 一つの病態のある時期を互いに示しているものもあるという推察がなされた。

結論を出すには, 関係各診療科の御協力のもとに, 多数の症例を経過観察し, 記録を詳細に検討しなければならない。

3. 酸化アルミニウムセラミックスを用いた歯内骨内インプラント

○三並弘子, 石田 浩, 永田俊彦, 河村高明

浜崎章弘, 幸田直彦, 若野洋一

徳島大学歯学部歯科保存学第二講座

歯科用インプラントの予後に影響を与える重要な問題点の一つに, 歯槽骨とインプラント材との境界部の組織構造がある。アルミナセラミックス材では歯根膜様の結合組織が認められると言われているが, その報告は多くない。今回私達は, 歯内骨内インプラントの適応となった患者の術後3ヶ月, 約1年のレントゲン写真を資料とし, マイクロデンシトメーター(ジョイスレーベル社)を用い, 植立歯牙の歯根膜を基準とし, インプラント周囲の歯根膜様部位について, 幅径とレントゲンの濃淡について検討を行い, 以下の結果を得た。

1) 幅径では, 術後3ヶ月のものは, 歯根膜の約3倍, 1年のものはほぼ同じ値

を示した。

- 2) レントゲン透過度では、歯根膜を100%とすると、3ヶ月で70%、1年後に58%となり、透過性が低下した。
- (3) 臨床的にもAnkylosisを疑う症例は認められなかった。

4. 極度な異常咬合を営む大臼歯の治療のあり方について

○矢野和巳，六車 豊，高橋由行，曾鴻 哲
多田 恒，山下 訓，山口和憲，河田照茂
徳島大学歯学部歯科矯正学講座

近年、大臼歯における異常咬合を有する患者が増えつつある。また、補綴的前処置として大臼歯の咬合改善のための矯正治療のニーズが高まりつつある。大臼歯部の異常咬合が長期にわたり放置されると、顎関節症、Caries、歯周病および顔の変形を生じ、また補綴的作業を困難にするなど様々な障害をひきおこす。

大臼歯部の異常咬合はTooth-Jaw Discrepancyによる叢生、第2乳臼歯の早期喪失、第1大臼歯の喪失、上顎骨あるいは上顎歯列の狭窄などが原因で生じ、缺状咬合、近心傾斜、交叉咬合としてあらわれる。これらの異常咬合の治療には、第3大臼歯の有無、空隙の有無など大臼歯部の所見に限らず、側方歯、前歯を含めた咬合関係の正しい把握が必要となる。

今回我々は、大臼歯部に異常咬合を認めた症例について、咬合全体を考慮した治療を行いよい結果を得ることができたので、矯正学の立場より大臼歯部の異常咬合の治療のあり方について検討を加えてみた。

5. マウス頭蓋骨由来細胞の分離培養 (その1)

○住谷光治，梅原光司，河田照茂

徳島大学歯学部歯科矯正学講座

矯正的歯牙移動に伴う骨変化を細胞レベルで検索するために、今回その基礎実験としてマウス頭蓋骨よりCollagenase digestionにより細胞を分

難することを目的とし、以下の実験を行った。

材料・方法) 1日齢のマウス30匹の頭蓋骨より得られた骨膜および骨片を Collagenase で消化し、細胞の遊出状態を切片標本で観察した後、これをもとに3細胞群を採取した。そして培養下における形態観察、細胞内 Ca 含量 Alkaline phosphatase (ALP) 活性の比較検討を行った。

結果) 5日間培養を行い、骨膜より得られた細胞を細胞群1、骨片45分間処理により得られた細胞群を2、骨片105分間処理により得られた細胞群を3とした。形態的特色に関して細胞群1は紡錘形を示す単核細胞であるのに対し、細胞群2、3は円形で敷石状に単層配列を示した。また3細胞群のCa含量、ALP活性値は次のようであった。

細胞群1	Ca : 8.45	ALP : 0.39
" 2	Ca : 41.2	ALP : 0.96
" 3	Ca : 78.3	ALP : 2.31

(Ca : n moles / 10^6 cell ALP : Unit / mg protein)

以上の結果より骨膜付近より遊出したと思われる細胞群1では、Ca含量、ALP活性値はいずれも低く、骨片より遊出したと思われる細胞群2および3はいずれも高値を示した。

6. ウイルス分離にて診断した非定型ムンプスの2症例

○伊賀弘起, 由良義明, 寺嶋和義, 小林章祐
佐藤光信

徳島大学歯学部口腔外科学第二講座

両側性に耳下腺腫脹をきたす典型的なムンプスは診断が容易であるが、片側性に頬部腫脹を認める非定型症例では臨床診断が困難となる。一般的には急性期から回復期にかけてウイルス抗体価の上昇を認めれば血清学的に診断が下されるがこの検査法では早期診断として有用性が低い。我々は、ウイルス分離にて早期に非定型ムンプスの診断を下し得たのでその2症例につき報告する。片側性の顔面腫脹をきたし歯性の炎症を疑われて当科受診した成人2症例に対し、非定型ムン

プスを疑ってウイルス分離を試みた。患者唾液をVero細胞に摂取したところ、3～4日後にウイルス増殖による細胞変性が認められた。このウイルスは蛍光抗体法と電顕によりムンプスウイルスと同定され、初診より早期の時点で診断を下すことができた。以上より非定型ムンプスで口腔外科を受診する症例の存在すること、これら症例の早期診断にはウイルス分離検査が有用であることが、明らかとなった。

7. ヒト唾液腺癌細胞に対するモノクローナル抗体の作製

○加地亮詞，山下卓雄，永峰伸一，林 良夫*
吉田秀夫，佐藤光信

徳島大学歯学部口腔外科学第二講座

徳島大学歯学部附属病院臨床検査室*

臨床応用目的にヒト腫瘍細胞を用いたモノクローナル抗体の作製は数多く報告され臨床応用されているモノクローナル抗体も認められる。しかし口腔領域腫瘍細胞を用いたモノクローナル抗体はほとんど認められない。我々はヒト唾液腺腫瘍細胞(HSG細胞)に対するモノクローナル抗体(5B-10A, 2C-1A)を作製した。両抗体はIgG2aサブクラスを示し、ELISA法、間接蛍光抗体法にて唾液腺系腫瘍細胞に反応を示し、HeLa細胞と交差反応を示した。両抗体はOKK細胞との反応性より異なる抗体と確認された。蛍光抗体法の所見より両抗体は腫瘍細胞表面上の抗原を認識していると示唆された。⁵¹Cr release assayにより補体依存性細胞傷害能を検討したところ、両抗体とも認められなかった。

今後、腫瘍細胞表面上の抗原の決定を行うと共に、さらに両抗体の特異性を調べ臨床への応用の可能性を検討したい。

8. OK-432の口腔癌患者免疫動態に及ぼす影響

○浦田 満, 吉田秀夫, 板東高志, 佐藤光信
徳島大学歯学部口腔外科学第二講座

口腔癌患者においては、遅延型過敏症、リンパ球幼若化現象、抗体依存・細胞媒介細胞傷害性等に関連した免疫検査の結果より、担癌宿主の免疫防御機構の強く障害されている事が示唆されている。そこで、我々は口腔癌59例について未治療・各治療時期に末梢リンパ球のT、B、T α とK細胞画分とNK細胞活性並びに単クローン抗体によるリンパ球亜群、更に血清インターフェロンレベル、免疫グロブリンと β_2 -ミクログロブリンの動態を解析するとともに、強力なBRMであるOK-432皮内投与のこれら免疫パラメータに及ぼす影響を検索した。その結果、1)OK-432皮内投与においてはplaque forming cell assay系により測定したK lymphocyteの増加およびNK活性の増強、さらには血清IFN力価の増大を引きおこす。2)OK-432皮内投与はT α cellとOKIa1⁺ cellの数、比率に影響を及ぼす。

以上2点が明らかとなった。

9. 多肢択一形式の試験に対する数学的検討

○中條信義

徳島大学歯学部附属病院麻酔診療室

国家試験をはじめ各種試験は多肢択一問題の形式が一般化している。この種の試験は採点に恣意が入らないという意味で実力を客観的に評価しうるとされている。そこで5者択一式の場合、真の実力と運を天にまかせて解答するみかけの実力の合計を正答率とし、これがどんな分布をするか確率統計として計算した。真の実力を60点以下と評価する誤り（第1種過誤）と60点以上に評価する誤り（第2種過誤）がある。この場合第1種過誤を5%以下にするには93問以上、第2種過誤を5%以下にするには183問以上の問題が必要である。また選択肢の数を増しても過誤はあまり影響を受けない。しかし以上の検討は確率を一定にして考えているという誤りがあり、このような多肢択一形式の試験では真の実力評価は困難と思われた。

10. パーソナルコンピューターを用いたパーソナルデンチャー 設計システムの試作

○エキスパートシステムの開発に向けてー

○呉竹浩一，原田礼子，羽田 勝，松本直之

徳島大学歯学部歯科補綴学第一講座

歯牙欠損をもつ患者に対する補綴処置の方法は，支台歯，鉤歯，維持装置の種類等により，様々な設計で行われている。そこで今回は，学生教育のために，パーソナルコンピューターを用いた，部分床義歯だけでなくブリッジの併用をも考えた補綴物設計に必要な鉤歯を決定するシステム試作した。

本システムでは残存歯，又は欠損歯，残存歯の動揺度を入力することにより，コンピューターがそれぞれに合った鉤歯を選択する。また，部分床義歯のみによる設計，ブリッジを併用した設計，動揺がある場合の設計等，各種の治療方針にそった設計が同一症例に対し可能である。出力された各種の設計例を相互に比較，検討することにより，最も合理的な補綴物設計が選択できる。

また，本システムでの設計例は，教科書及び，臨床での患者の設計例とほとんど類似しており，今後，ポリクリ及び一診の学生に対して教育用として応用していきたい。

<運営委員会よりのお願い>

- 四国歯学会は，徳島大学歯学部を中心に，広く四国四県の諸先生方の御協力を得ての学会です。例会，講演会について，会員各位の御意見をお寄せ下さい。
- 昭和61年度会費をお納め下さい。年会費は2,000円です。直接事務局か，または下記に振込んで下さい。

◎ 阿波銀行蔵本支店 177-237700 四国歯学会

◎ 郵便振替口座 徳島1-7188 徳島大学附属病院郵便局 四国歯学会

- 四国歯学会入会御希望の方は入会金1,000円，年会費2,000円を添えて下記宛，お申込み下さい。

◎ 徳島市蔵本町3-18-15 徳島大学歯学部内 四国歯学会事務局
電 0886-31-3111 内線5102

または会計担当委員，庶務担当委員に直接お申込み下さい。